

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	駒井 匠（こまい たくみ）
○学位の種類	博士（文学）
○授与番号	甲 第973号
○授与年月日	2014年3月31日
○学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項 学位規則第4条第1項
○学位論文の題名	平安前期の王権と仏教
○審査委員	（主査）本郷 真紹（立命館大学文学部教授） 美川 圭（立命館大学文学部教授） 杉橋 隆夫（立命館大学文学部特別任用教授）

<論文の内容の要旨>

本論文は、先行研究で十分な検討がなされていない平安前期の王権と仏教の関係を究明する事を目的とし、とりわけ宇多上皇の出家・受戒と受灌頂という、空前の事態が生じた九世紀末～十世紀初頭の醍醐朝に主眼を置き、宇多の行動の意義を解明せんと試みる論考である。序章・第一章～第四章・終章で構成され、このうち第二章と第三章は既発表論文、第一章は近刊予定の投稿論文、第四章が新稿である。

序章では、古代仏教史研究の到達点と課題を確認する。井上光貞と藺田香融による研究が通説的位置を占めてきた古代仏教史研究に於いて、吉田一彦や上川通夫、さらには平雅行等による批判が試みられ、また近年堀裕等により新たな観点からの考察が試みられている。こういった研究史の流れの中で、本論文の占める位置とその意義を確認するため、他の段階に比して十分な考察が試みられていない感の強い平安前期、とりわけ九世紀～十世紀の段階に於ける王権と仏教の関係についての検討がもつ重要性を指摘した上で、転換点となる宇多上皇の去就を取り上げる意義を論じている。

第一章「天皇の受灌頂と皇帝の受灌頂」では、中国・唐代の玄宗・肅宗・代宗の三皇帝が不空より受けた灌頂が、安史の乱の混乱の中で「金輪聖王」という新たな宗教的権威を付随する事を目的に行われたものであるのに対し、日本に於いて文徳天皇と清和天皇が結縁灌頂を受けた意義は全く異なり、両天皇とも側近の官人とともに灌頂を受けた事に着目し、その目的とするところは自身の陣営の連携を強めることにあったと評価する。

第二章「宇多上皇の出家に関する政治史的考察」では、寛平九年（八九七）醍醐への譲位後二年を経た昌泰二年（八九九）に宇多上皇が出家した政治的意義について考察する。

天皇やその近親者の過去の出家が、保身を目的とする政治的地位の放棄や、他者或いは自身の病氣平癒等を期待して行われたものであったのに対し、宇多上皇の出家は、儒教的な父子関係に加え、仏教的な師・施主の関係という、醍醐天皇との間に新たな関係を構築せんとする、積極的な目的を有するものであったとする。それ以前の上皇については、嵯峨天皇の淳和天皇への譲位後に見られた太上天皇尊号奉呈により、天皇の意志でその地位が与えられる他律的存在となり、実質的に政治的地位は低下したと受け止められているが、宇多上皇は出家後程なくして受戒すると、醍醐天皇より太上天皇尊号奉呈を再三にわたり拒絶する。これは政治的影響力を自身に付帯する為に、出家身分になる事で新たな宗教的権威を身に付け、あくまで上皇が天皇から相対的に独立した存在である事を目指した事によるものと評価している。

第三章「平安前期における南都授戒制度の変質とその背景」では、平安前期における授戒制度の変質の具体的経緯が知られる貞観七年（八六五）三月二十五日付太政官符と、寛平七年（八九五）三月六日付太政官符の二つの史料を検討素材として、その歴史的意義を究明しようとする。従来得度後に二年乃至は三年の沙弥行修行期間が設定され、また授戒に際しては教学理解の内容を計るための課試が義務付けられていたが、寛平七年の段階で、宇多上皇の出家の戒師である益信の申請により双方が廃止される。先行研究では、授戒の規定が内容的に緩和された事で、授戒が通過儀礼化したと評価されたが、この変更は出家後程なくして授戒を志す宇多上皇の受戒の正当性を確保するために打ち出された政策と解釈する。

第四章「宇多法皇考」では、第二章で展開した宇多上皇の出家と受戒の意義に加え、何故従来の結縁灌頂でなく、伝法灌頂を受けたのかという点に注目し、その政治面と宗教面の双方に与えた影響について考察する。宇多上皇が伝法灌頂を受け、多数の真言僧にこれを授け付法の弟子とし、法脈を形成するに至った事について、自身に新たな宗教的権威を付帯する事で、世俗の秩序から隔離された存在である事を世に訴え、新たな天皇との関係を築こうとしたと解釈する。これは同時に、拠点寺院間で競い合っていた真言宗の教団に対しても大きく影響を及ぼすところとなり、この時期行われた空海に対する弘法大師号奉呈に加えて、真言宗の再編を計ったものと評価され、藤原摂関家と密接な関係を築く事で勢力を拡大させてきていた天台宗に対抗する意味においても、極めて重要な意義を有したとする。

終章では、第一章から第四章で展開した論の要点を踏まえて、自身の研究の到達点を確認し、これを前提として将来目指す研究の方向性、とりわけ平安期の政治と宗教の問題を取り上げる上で、究明に努めねばならない課題を指摘し、その研究のスタンスを開示している。

<論文審査の結果の要旨>

審査委員三名による所見は、以下の通りである。

本論文は、日本古代仏教史の研究史上十分な検討と、その上での通説的理解が確立していない感の強い平安前期、とりわけ古代仏教から中世仏教への転換の第一段階と位置付けられる九世紀の状況に対する考察を通じて、当該期の王権と仏教の実態を明らかにせんと試みた、精力的な論考である。その中でも、全体の理解に重要な位置を占める宇多朝の動向、とりわけ宇多上皇自身の譲位、出家、受戒、受灌頂といった行動の有する歴史的意義について、前提となる状況の分析とその特質を踏まえて究明する事を目指している。そのため、結果として、すべて宇多朝の問題に議論が収斂された感が否めず、前代の嵯峨朝や清和朝の状況について、やや通説的理解に便乗した感があるのは反省すべき点と言えるが、それを差し引いても、宇多上皇の出家と受戒、更に伝法灌頂の授受といった点に注目し、政治史上のみならず、真言宗の新展開という仏教史上の意義についても十分に検討を加えたことは、学問的成果として高い水準にあることを示している。

以下、各論について講評する。

第一章「天皇の受灌頂と皇帝の受灌頂」は、佐藤文子・原田正俊・堀裕・松浦典弘編『仏教がつなぐアジア—王権・信仰・美術—』（2014年5月刊行予定・勉誠出版）に収載予定の論考である。玄宗・肅宗・代宗という唐の皇帝の受けた灌頂と、文徳・清和両天皇が受けたそれとの異質性を指摘し、日本の場合は天皇自身の権威付けというよりも近臣との連帯を強化する目的で結縁灌頂が行われたと受け止めるのは、一つの解釈として説得性を有するものであり、宇多上皇の受灌頂の意義を検討する上で前提となる議論を構成することになる。ただ、文徳・清和の志した近臣との連帯の強化というものが、何に対して、どのような効果を具体的に期待するものであったのか、また、それが如何ほど天皇自身の意向を反映し、さらに、結果として従来の天皇の宗教的権威にどのような影響を及ぼしたのかといった問題について十分付言されておらず、この点について今後改めて検討が必要と考えられる。

第二章「宇多上皇の出家に関する政治史的考察」は、『佛教史学研究』第55巻第1号（2012年11月25日発行）に掲載された論考である。それまでの天皇およびその近親者の出家と宇多上皇出家の相違を的確に指摘し、宇多の出家の有する極めて政治的な意義について、当時の政治状況を踏まえ一定の評価を下した事は、これまで看過されていた重要な論点を取り上げ、新たな評価を提示した点で、高く評価すべきものである。皇位継承や、天皇との相対的な権力関係といった当時の王権に直結する課題を、出家という宗教的手段を講じた意義から究明しようと試みた点は、斬新な切り口で、今後の研究に新たな視点となり得るものと言える。ただ、専ら前代の状況との相違点から意義を解明しようと努めており、後代との関係について全く省みていない点は、説得性を失する要素となり得る。のちの摂関時代・院政期を通じて、上皇や朝廷有力者の出家は頻繁に生じており、宇多の出家とそれらとの関係をどのように受け止めるべきであるのか、出家の意味自体が再び変化するか、新たな宗教的権威の構築が後世でも志され、また一定の成果を見たのか、といった点について、今後更に緻密な考察を行い見通しをもつことが、逆に本論文の意義を高める事

にも繋がるのではないかと考えられる。

第三章「平安前期における南都授戒制度の変質とその背景」は、『立命館文学』第 624 号（2012 年 1 月 31 日発行）に掲載された論考である。前章にて検討した得度の意義に加え、出家者の第二段階たる授戒の問題を取り上げたもので、次章にて展開される、宇多上皇の受戒の意義を究明するための前提として検討された内容というべきものである。二つの太政官符の内容を綿密に分析し、授戒の前提条件自体が段階的変遷を辿る事を明らかにし、その意義について見解を呈している。内容的に大きな問題は見出せないが、受戒資格の課試に官人が関与しなくなった事態をして、課試そのものが廃止されたと解釈する事が妥当であるか否かについては、今少し慎重な検討を要する。俗官の不関与自体大きな意義を有するものであるが、もし僧官或いは師僧が何某かの課試に代わる措置を講じていたとすれば、実質的に授戒の過程が簡略化されたと見なす事は早計となろう。とすれば、南都の意向で授戒の通過儀礼化が生じたとする通説的理解そのものにも再考の余地が生じる事になる。宇多上皇の去就と関連付けて解釈せんとする筆者の見解を否定するものではないが、更に深めた考察が求められる。

第四章「宇多法皇考」は新稿である。第一章から第三章で展開した議論を踏まえ、改めて宇多上皇の受灌頂の有する意義を考察する。文徳や清和が受けた灌頂が結縁灌頂であったのに対し、宇多は伝法灌頂を受けて阿闍梨となり、またそれを、自身と同じく真言僧に授けたことが、のちの法流の形成を導いた。その意図したところを、当時の政治状況、とりわけ醍醐天皇との関係から、独自の宗教的権威を構築し、天皇との間に新たな関係を築こうとしたものであり、また、結果として天台宗に比して劣勢に置かれていた真言宗を再編し、その地位を向上させる事に繋がったとする見解は、説得性に富むものである。それでは、何故に、宇多上皇の時代にのちの院政の如き政治体制が構築できなかったのか、といった点について等閑に付しているのは、重要な論点を避けたと受け止められても無理からぬものといえ、従来宇多の出家・受戒・受伝法灌頂の事実が重視されて来なかったことを問題視し、注意を喚起すると共に新たな解釈を提示しようとする上で、やはり不可欠の論点ではないかと考えられる。今後更に研究を進め、この点について補強する必要がある。

以上のような批評が各委員から呈されたが、本論文自体の学問的価値については十分認めうるものである事を、三名の委員の総意として確認した。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の公開審査は、2014 年 7 月 11 日（金）午後 2 時 00 分から 4 時 00 分まで、末川記念会館第 3 会議室で行われた。審査委員会は、本論文の学問的水準の確認を行うとともに、申請者の本学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期課程の在学期間中における様々な研究活動、また公開審査の質疑応答の内容を通じて、申請者が博士学位に相応しい能力を有することを確認し、本学学位規程第 25 条第 1 項により、これに関わる試験の

全部を免除した。

以上の点を総合的に判断して、本学学位規程第 18 条第 1 項に基づき、申請者に対し「博士（文学 立命館大学）」の学位を授与することが適当であると判断する。